

南都仏教における女人往生思想

納 富 常 天

女人往生・女人成仏は鎌倉新仏教における重要な課題であった。旧仏教Ⅱ古代仏教においては、五障・三従・煩惱深重という理由から、女人は常にその対象の外に置かれ、女人往生・女人成仏は困難であり、不可能とされていた。ここでは旧仏教の一翼を担った南都仏教を、戒律の嚴守により復興した叡尊およびその一門——西大寺流——について考察を進めてみたい。西大寺流における女人往生思想は結論的に云うと、古代仏教の伝統的立場に立つ転女身による往生であつたが、それは一切の女人は母とする独自の女人觀と戒律の嚴守・光明真言の受持を母胎とするものであつた。

まず古代仏教における女人觀について、經論や鎌倉新仏教諸宗の開祖達の言をかりて考察してみたい。『涅槃經』には「若人不知_レ是_レ仏性_二者、則無_レ男相_一。所以者何、不_レ能_二自知_一有_二仏性_一故。若有_レ不_レ能_二知_一仏性_二者、我説_二是等_一名為_二女人_一。」とあり、『華嚴經』には

女人能張愛欲網 羅捕一切諸愚夫 世間染欲諸衆生 如魚吞鉤為

所食（中略）一切憂惱及恐怖 皆從女色之所生 若能觀察無貪著 解脫無憂無恐懼_三

とあり、天親の『往生論』には

女人及根欠二乘種不生_三

とあり、道宣の『淨心誠觀法』の「誠觀女人十惡如實厭離解脫法」第十一には女人の十種惡業として貪婬無量無厭、嫉妬心如毒蛇、詬曲詐親、放逸、口多惡業、厭背夫主、一切女人多懷詬曲実情難得、貪財不顧恩義、慾火燒心、女身臭惡不淨常流を挙げている。なお存覺の『女人往生聞書』には諸經論を列挙し、女人の業障について詳細に紹介している。

また法然の『四卷伝』には

女人は障重して罪深故に 一切の処には皆嫌たり 是則内には五障あり 外に三従ある故也_三

とあり、道元の『正法眼蔵礼拝得髓』には

いま至愚のはなはだしき人おもふことは、女流は貪婬所対の境界にてありと（中略）また日本国にひとつのわらひごとあり。いは

ゆる、あるひは結界の境地と称し、あるひは大乗の道場と称して、比丘尼・女人等を来入せしめず。

とあり、日蓮の『葉王品得意鈔』には

女人衆罪根本破国之源也。

とある。

これらの経論や法然・道元・日蓮等の言によつて知られる古代仏教における女人は、男子と異なり、煩惱深重であり、生まれながら身につけている成仏への障り——十種惡業・五障三従——によつて成仏不可能とされた。またそればかりか女人は貪欲の存在として、三途八難の苦の根本であり、男子の仏法修行を妨げる最大のものとして、嚴重に結界を設け、厭離疎外されなければならなかつた。

しかしこの度し難い惡性の女人も、往生・成仏の門戸が全く閉ざされていたわけではなかつた。弥陀四十八願中の第三十五轉女身成男願は云うまでもなく、『大愛道比丘尼經』に

有女人作沙門。精進持戒具足無欠減。不犯如毛髮。現世得化成男身。便得無量決得作仏。

とあるように、精進持戒して毛髮程も犯さなかつたら、現世に男子と化し成仏することができるとあり、聖徳太子の『法華義疏』にも葉王品の受持により「明らかに女身を転じて無量寿国に生ず」とあるからである。ただ古代の仏教にお

いては十種惡業や五障・三従を強調し、女人を拒否する余り、女人の往生成仏について何等積極的に取組むことをしなかつただけである。

叙尊およびその一門における女人觀も、古代仏教の傳統的立場に立つていることは云うまでもない。それは叙尊の『梵網經古迹記科文輔行文集會本』の「無慈行欲戒」第三に、智論十四を引き、

於諸衰中一女衰最重。刀火雷電霹靂怨家毒蛇之屬猶可暫近。女人慳妬、瞋諍、嫉妬、貪嫉、不親近。何以故。女子小人、心淺智薄。唯欲是視。不觀富貴智德名聞。專行欲惡、破人善根。桎梏鎖閉、繫囚圍。雖曰難解、解是猶易開。女鎖繫人染固根深。無智沒之難、可得脫。衆病之中女病最重（中略）女賊害人是不可禁。蛇含毒猶可手捉。女情惡人是不可觸。

とあり、『興正菩薩御教誡聽聞集』の「女人出家事」に、阿難が大愛道尼すなわち摩訶波闍波提の出家を如來に請つた時の如來の言葉として「女人を度すれば五百年佛法を滅すべし。これを許さず」とあるのをはじめとして「女人は五障の器」「女人の重業」等とあることから十分伺い知ることができる。

このように女人は惡性であり、成仏については非器であるとなす点は古代仏教の延長線上にあるが、西大寺流においてはそれ以外に、一切の女人は皆母であるとする独自の女人觀がみられる。それは叙尊における「一切の衆生を以て父母兄

弟となす」とする『梵網經』の重視、「婦命釈迦尊」願我於未來受生善惡處^ニ不^レ忘^ニ菩提心^一自然憶衆生^ニ皆是^ニ我父母^一設種種方便^ニ漸々令離^レ苦^一自他行願滿共証^ニ無上道^一とある敎尊の發願文、「幼而喪母、恒歎也、報謝失術、專恨也、孝心尤薄、既說一切女人、皆是母、只是過現異時而已」とある惣持の『四分律注比丘尼戒本』、さらには『大乘本生心地觀經』を刊行し、四恩に報いた忍性の行動等から伺い知られる。

このような煩惱深重で成仏不可能とする女人觀、および一切の女人は母とする女人觀は、やがて敎尊の戒律による興法利生と結びつき、「女人ナレドモ、今出家學道シテ受戒成就スル程ノ人ハ皆大丈夫也。実ニ可^レ悦也」と述べているばかりか、「願始今生母至一切衆生、永令離女身速令成菩提、願我此經永離女□、為他広悅令法久住」とある尼真妙の願文にみられるように、戒律嚴守による転女身成仏が積極的に説かれることになる。

敎尊の行実については『感身學正記』『行実年譜』『關東往還記』『御教誠聴聞集』等によつて詳細に知ることができ、が、敎尊は始め靈夢により真言密教を學んだ。しかし「サル程學ニ真言教ニ輩多魔道墮。以^レ之見^ニ教所判^ニ律法依^レ不^レ立也」として戒律へ転向したことが知られる。また敎尊における戒律の重視は「遺教經ニ云、若無淨戒、諸善功德、皆不^レ

得^レ生云々。大乘ハ利他ヲ本トス。而無^レ律儀、摂善饒益無故ニ、我ガ本意專ニ利他^ニ故、律儀ヲタマシクスルナリ」とあるように、利他を基本とするものであつた。ここに非人救済、殺生禁断を中核とする社会救済事業が展開するが、一方では父母に対する孝養、女人尊重の思想的立場により、積極的な女人成仏さらには女人救済運動として顕現する。

敎尊はその生涯に九万七千七百十人に菩薩戒を授けたとされているが、「夜に入り男女一千二百六十三人菩薩戒を受く」とある『關東往還記』の記事や『西大寺田園目錄』等から、その中には多くの女人が含まれていることが知られる。また特に敎尊の女人成仏・女人救済運動において注目しなければならぬのは、法華寺を中心とした比丘尼に対する教化である。寛元三年四月文徳房基忍他二名に沙弥尼戒を授けてから、文永三年二月八十八名に菩薩戒を授けるまで、その間約二十年にわたり、式叉摩尼戒・大比丘尼戒の授与、沙弥尼布薩・比丘尼布薩の始行、比丘尼鈔・梵網經古迹記・菩薩戒宗要・表無表章・教誠儀・行事鈔等の講義を盛んに行つて、が、弘安三年鏡恵の記録『授菩薩戒弟子交名』によると、「都合出家五衆八百二人之内、比丘三百八十九人、沙弥百二十二人、比丘尼百八十三人、式叉尼四十八人、沙弥尼六十人」とあり、その他に「形同沙弥尼百三十八人」とあるから、合計四二九人の尼衆が關係していることになり、その教化が

如何に盛んであつたかが知られる。

また叙尊は七衆を確立することにより、戒律の復興を目指していたから、建長元年二月六日、法華寺において慈善等十二人に大比丘尼戒を授けた時は、こみ上げる興奮を抑えきれず、「由是七衆皆備。受隨兼具。律燈再光。宗風大扇」と記していることは注目しなければならないが、さらに『御教誠聴聞集』に「始ハ七衆具足セント比丘尼ノ始テ出デクルヲ悦トシナンドシタル風情ニ候シ。近年ハ一日一夜ニ廿余人ナンド受ル程ニ成テ候」とあることから、叙尊の弛まぬ努力が尼衆達の積極的参加を促したものだと思われる。

このような叙尊による女人成仏・女人救済運動は、忍性・總持・栄真・賢心・湛睿等の門流に承継された。特に忍性は社会救済事業において高名で、生涯における主な業績として所度の弟子二千七百四十余人、寺院の結界七十九ヶ所、諸州の架橋百八十九ヶ所、殺生禁断六十三ヶ所等が挙げられるが、『孟蘭盆礼文』と共に開板した『大乘本生心地観経』は、父母の恩をはじめとする四恩に報ゆるためのものであつた。また「学問ハ我身非^ル其器ニ故ニ無力」とあるように、学問的立場では衆生の利益は計ることができないとした忍性が、文永十年極楽寺において開講した『四分律含注戒本疏行宗記』に尼衆も参加していることは注目しなければならない。

また總持においては『転女身経』の開板、『四分律注比丘尼

戒本』および『比丘尼鈔糾補資行録』の撰述を取り上げなければならぬ。まず最初に大乘了義の真詮で、しかも女人解脱の指南である『転女身経』は、その刊記により釈尊の鴻恩に報い、また煩惱深重の女人を救済せんため、法華寺の尼僧と有縁の女人に勧めて開板したことが知られるが、特に「若依此経修十法行当以深心誦此文焉^{明出金光} 悉願女人變為男 勇健聰明多智慧 一切常行菩薩道 勤修六度致彼岸」とあるのは注目しなければならない。また『四分律注比丘尼戒本』と『比丘尼鈔糾補資行録』は、いずれも金沢文庫のみが所蔵する稀観本で、共に亡母の恩に報ゆるために撰述したものであるが、それはとりまなおさず尼衆の行化を助けるものであつた。また『四分律注比丘尼戒本』の成立事情については、その識語によると、南山道宣の撰集録には僧尼並んで含注戒がなければならぬにも拘わらず、尼本が未伝であるから、總持自から注釈を施し、さらに正確を期するため、叙尊に監修を依頼していることが知られる。

次に栄真においては總持の撰にかかる『四分律注比丘尼戒本』を開板しているが、それは刊記に「比丘尼戒本、令彫印板志、近訪慈母之冥路、遠助尼衆之行化、冀塵露山海昭揚□爾」とあるように、母の菩提をとむらうと共に、尼衆の行化を助けんとするものであつた。

また賢心は平盛親等の捨財で『四分刪定比丘尼戒本』を開

板しているが、その志は中国辺邦の尼僧の戒儀を資助せんためのものであつた。またこの『四分刪定比丘尼戒本』は刊記の後に「右摺写一百卷進上於南都法華寺、奉施現住比丘尼衆等志者、殊悲母并祖母幽靈、転五障之器、成三聚之法身、乃至法界男女平等得其益矣」とある墨書銘によつて、転女身による成仏を祈請していることが知られる。

また華嚴・戒律の学匠として有名な湛睿も、『四分律比丘尼鈔』を手沢すると共に『梵網經』を開板しているが、これは叡尊―忍性―總持―栄真―賢心と系譜する女人成仏・女人救済運動と軌を一にするものと思われる。

次に光明真言の受持による転女身成仏について考察してみたい。光明真言は諸々の罪報を除き、所苦の身を捨て、西方極樂往生を可能ならしめるものとして、早くから貴族社会において信仰された。道範の『光明真言四重釈』によると、光明真言は淨不淨をえらばず速疾に成仏し、称名念仏よりも易行であり、且つ勝れた功德があるとされる。また光明真言の信仰においては『光明真言句義釈』『光明真言功能』『光明真言加持土沙義』『光明真言土沙勸進記』『光明真言土沙勸進別記』を著わした明恵も高く評価しなければならぬが、その信仰を民衆にまで普く及ぼしたのは西大寺叡尊や白毫寺知道としなければならない。特に叡尊は毎年七日七夜の光明真言会を開き、積極的に光明真言の弘布に努め「諸罪消滅 極樂

往生現世富貴 長寿望遂 鬼神痛苦愁除乃至有縁無縁亡者等皆離苦得脱無礙」を目指したが、やがてこれは鎌倉浄光明寺等を中心とする「不断光明真言并浄土宗等四宗興隆發願事」を始めとして、全国的に普及展開することになった。

光明真言の受持による転女身成仏については、金沢文庫本『光明真言釈』に「若女人有女身厭此真言受持セハ女身轉男身成事ニム 若常受持女人大梵天王ト成事ニム 若女人有其ミニク、卑此真言受持ニ端嚴形ニテ諸人愛敬セラレム（中略）法花經女人五障出中一者不得作梵天王云 然此真言持ヨリテ其障除梵天王成也（中略）此真言持女人此五障除皆自在得也」とあり、抜苦与樂、除病延命と共に光明真言の功能の一つとして強調されている。そしてこの光明真言受持による転女身成仏思想は、光明真言信仰の盛況に伴い広く行われ大きな影響を与えた。

以上のように西大寺流においては、女人は悪性であり、非器であるとする古代仏教の伝統的立場を承継すると共に、一切の女人は母であるとする独自の女人観に立ち、戒律の嚴守および光明真言の受持による転女身成仏を強調した。そして女人の転女身成仏を資助し容易にするため、叡尊およびその一門は、授戒・戒律書の講義・『比丘尼鈔補資行録』『四分律注比丘尼戒本』の撰述、『大乘本生心地觀經』『転女身經』『四分律注比丘尼戒本』『四分刪定比丘尼戒本』『梵網經』等

の出版等を行っているばかりか、西大寺を中心に積極的に光明真言を興行していることは注目しなければならない。

- 1 大正一二・四二二・中参照
- 2 大正一〇・七九〇・下―七九一・上参照
- 3 大正四〇・八三〇・下参照
- 4 大正四五・八二四・上―中参照
- 5 法然上人伝の成立史的研究第一巻一一四頁参照
- 6 岩波文庫本上巻一二七―一二八頁参照
- 7 昭和定本日蓮聖人遺文第一・三四一頁参照
- 8 大正二四・九四九・下参照
- 9 日本大藏經大乘律章疏二・三一四・下―三一五・上参照
- 10 西大寺教尊伝記集成一三二頁参照
- 11 21 22 金沢文庫古文書識語篇一〇三二号参照
- 12 日本思想大系一五・鎌倉旧仏教二二〇頁参照
- 13 西大寺教尊伝記集成三九三頁参照
- 14 15 興正菩薩御教誠聴聞集（日本思想大系一五・鎌倉旧仏教二一頁）参照
- 16 西大寺教尊伝記集成一三四頁参照
- 17 日本思想大系一五・鎌倉旧仏教二二三頁参照
- 18 " " 二〇〇頁参照
- 19 金沢文庫古文書識語篇一〇一四号参照
- 20 金光明經依空滿願品第十（大正一六・四二五・中―下）に、菩提行により自在を得、安樂住を得として、天女の転成男子を説いている

南都仏教における女人往生思想（納 富）

執筆 者 紹 介（二）

- | | |
|-------|--------------|
| 村上真完 | （東北大学助教授） |
| 中村瑞隆 | （立正大学教授・文博） |
| 宇野道子 | （北海道大学大学院） |
| 伊藤 篤 | （北海道大学大学院） |
| 岸 一英 | （仏教大学大学院） |
| 森山清徹 | （仏教大学大学院） |
| 大川圓道 | （仏教大学大学院） |
| 水田恵純 | （西本願寺伝道院研究生） |
| 神谷麻俊 | （自白学園高等学校教諭） |
| 龍村龍平 | （大谷大学大学院） |
| 一色順心 | （大谷大学大学院） |
| 塩田隆明 | （大正大学大学院） |
| 西崎 専一 | （名古屋音楽大学助手） |
| 木村邦和 | （大谷大学大学院） |
| 池田宗讓 | （大正大学大学院） |
| 古田和弘 | （大谷大学講師） |

（五六頁につづく）